

井出孫六『満蒙の権益と開拓団の悲劇』



標題は「岩波ブックレット」シリーズ〈日本近代史〉9、1993年。
写真は表紙掲載の日満両国旗をもって「満州」に出発する人びと。

敗戦時における開拓団の数を調べてみたことがあります。旧満州における当時の日本人の総数はざっと155万人といわれていますが、開拓団とその家族は27万人ほどと目されています。国策にもとづいて開拓団は日本全国から送出されたのですが、どちらかといえば西日本よりは東日本が多かった。全国一の送出県といわれる長野県の開拓団とその家族は、3万3740余名という数字になって示されています。第二位の山形県の約1万5000人に比べて、いかに多くの人びとが送出されたかがわかりますが、それは全体の13%にあたります。「残留孤児」の身元判明者10人の中に、かならず1人か2人、長野県の関係者がふくまれているのは、まさに送出された人数にそのまま反映していることに気づいて、私はおどろかずにはいられませんでした。

なぜかくも開拓団に、「残留孤児」が多く生みだされてしまったのか、そしてまた、なぜ長野県でかくも多く開拓団を送り出さなければならなかったのか、悲劇の背後にある歴史に目をこらしてみなければならなかったのだと思います。

いつの時代にも、たとえそれが勝利した戦争でも、戦争の結果には、次代にかならず負の遺産が遺贈されてついてまわる、という鉄則があるように思います。1905年9月5日、アメリカのニューハンプシャー州の軍港ポーツマスで締結された日露講和条約には、大要、つぎのような5項目が盛りこまれました。

1 日本は朝鮮半島において、政治上、軍事上および経済上の卓絶した利益をもつことが認められ、ロシアは、日本の朝鮮における指導、保護および監理をすることを祖礙、干渉しないこと。

2 旅順港、大連ならびにその付近の領土（関東州）および領水の租借権およびその一部をなす一切の権利、特権を、ロシアは日本に譲渡すること ……

日露戦争は20世紀の開幕とともに行われた戦争ですが、この5つの項目に盛り込まれた勝利の美酒が、じつは20世紀を通じて「負の遺産」として日本人に背負わされたことは、その世紀末にあたる今日からみて歴然としてくるといえないでしょうか。

大正から昭和にかけて、植民地、朝鮮の経営と満蒙の権益は、統帥権の問題とともに、日本政治のまさに桎梏として機能していくことをみれば、それらは日露戦争の「負の遺産」として日本人の背に負わされたものというべきではないでしょうか。

(2017年8月13日)